

Analysis of the Acceptability of Gratitude Expression by Chinese Learners of Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: XIAO, Lei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00064094

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中国人日本語学習者の日本語感謝表現の 適格性に関する検討

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
肖 蕾

要旨

本研究は、中国人日本語学習者による日本語の感謝表現の適格性について検討したものである。中国人日本語学習者の感謝表現と日本語母語話者の感謝表現の異なりに関する研究は数多く見られるが、それらの異なりがコミュニケーションの成否にどのような影響を及ぼすかは十分に明らかにされていない。そこで、本研究では、DCT (Discourse Completion Task: 談話完成タスク) で収集した中国人日本語学習者64名の日本語感謝発話のうち、代表的な発話例44例に対する日本語母語話者22名の「適格性」評定調査を行った。特にネガティブなイメージを形成しやすい感謝表現にはどのようなものがあるか、どの要因によるかを、量的・質的な検討を行った。分析の結果、判定された1,013発話のうち、「適格性発話」と評定された発話例数は5割(493例)程度で、約半数は不適格性発話と判定された。また、学習者による「不適格な感謝表現」の要因となっているものには、語彙・文法等の「形態的不適格性」および、ストラテジーの選択・丁寧度等の「語用論的不適格性」に依るものの双方が観察された。また、「すみません」と「ありがとう」の使い分けの要因と中国人学習者の不適切使用の原因を検討した結果、「すみません」は該当行為の「当然性」が低い場合に選好されやすいが、日中の文化・思想的背景の相違が「当然性」の高低意識に影響を及ぼし、中国人学習者の不自然な使用を導いていることが確認された。本結果を中国人日本語学習者と共有することで、感謝表現の適切な使用が促されることが期待される。

キーワード

感謝表現, 適格性評定, 当然性

Analysis of the Acceptability of Gratitude Expression by Chinese Learners of Japanese

Division of Human and Socio-Environmental Studies
Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

XIAO Lei

Abstract

This study discusses the acceptability of Chinese Japanese language learners for gratitude expression in Japanese. Although many studies have analyzed the differences in expressing gratitude between Japanese learners and native Japanese speakers, these studies do not fully explain whether these differences will lead to communication failures. Therefore, this study used a written questionnaire to collect Japanese gratitude

expressions from 64 Chinese Japanese learners using the Discourse Completion Task (DCT). Next, 64 cases were drawn, and 22 native Japanese speakers were asked to evaluate their acceptability. This study analyzed which gratitude expressions would give Japanese people a bad impression and their reasons through quality and quantity discussions. The results showed that among the 1,013 conversations judged, only 48.7% (493 cases) were evaluated as "acceptable expressions." The reasons for these expressions can be divided into grammar errors, which refer to errors in grammar and vocabulary, and pragmatic issues, which are caused by the choice of strategies and the degree of politeness. Simultaneously, it was found that "Excuse me" takes precedence over "Arigato gozaimasu" is used when the action benefiting the other party has less naturalness to occur there. However, due to differences in the cultural and ideological backgrounds between China and Japan, naturalness will change, causing the misuse of Japanese among Chinese learners. The results of this study contribute to the improvement of Japanese Chinese language learners in Japanese gratitude expressions.

Keyword

Gratitude Expression, Acceptability, Naturalness

1. はじめに

感謝行動は多くの言語で共通にみられるが、そのタイミングや表現方法は言語によって異なる。日本語と中国語も感謝行動が異なっており、既に複数の対照研究が行われている(李, 2014; 滝浦・大橋, 2015; 孫, 2007他)。そして、これらの感謝行動の異なりが日中のミスコミュニケーションをもたらす可能性が指摘されている。李(前掲)は日本語と中国語話者の感謝のタイミングを検討し、中国語は日本語では通常行われる再度の感謝を行わないが、先取りの感謝を行う傾向があると指摘している。そして「先取りの感謝は話し手の意志を一方的に相手に押し付け、相手のフェイスを損ねるリスクが高い」と述べている(李 2014: 108)。このように日本語と中国語において、「言うべきとされるタイミングで言わないこと」「言わなくてもいいタイミングで言うこと」が、相手の言語話者に対して失礼な印象を与える可能性がある。

上記に基づくと、中国人日本語学習者が日本語で感謝の気持ちを表す際、母語の選好性に従って感謝行動をとると、日本語母語話者から「不適格」な感謝行動だとみなされ、相手に悪い印象を与える可能性があるということになる。しかし、日本

語学習者の感謝表現が本当に不適格かについてはまだ検証されていない。

また、外国語学習者が必要とする言語能力には文法に関する能力と語用論に関する能力に分けられ(清水, 2009)、日本語学習者の感謝の表現の不適格性についても、文法的な不適格性と語用論に関する不適格性があると考えられるが、学習者の感謝表現がどのように「不適格」かという研究があまり行われておらず、母語話者の評価がどちらに起因するものかについて詳細に検討した研究は管見の限りない。

そこで、本研究では、日本語学習者による不自然な感謝表現において、文法・語彙・表現などの日本語知識のミスを「形態的不適格性」、状況・場面・相手との人間関係などに対応していない不適格な言い方を「語用論的不適格性」とし、中国人学習者による日本語感謝表現の適格性を検討する。具体的には日本語学習者による「感謝表現」に対し日本語母語話者がどのように評価するか、特にネガティブなイメージを形成しやすいとされる感謝表現はどのようなものであるか、その要因は何かについて検討を行う。

なお、本研究では「感謝」を「話し手が相手の行為により利益を受けた場合、或いは利益を受けなかったが、相手の行為が好意的であると認識す

る場合にとる言語行動」と定義し、こうした言語行動で発する言葉を「感謝表現」とする。

2. 先行研究

日本語と中国語における感謝表現の研究には、ストラテジーの対照研究（李，2014）、使用ルールの対照研究（滝浦・大橋，2015）等がある。李（2014）は、感謝表現のストラテジーについて検討し、日本語の感謝表現における謝罪表現は混在型でも単独でも使用されるが、中国語では、謝罪と感謝の混在型はあっても「不好意思（すみません）」という謝罪表現は単独では使用しないと指摘している。滝浦・大橋（2015）は、人間関係における使い分けルールについて検討し、日本語はお互いの関係の「親疎」および「上下」を認識しているのに対し、中国語では親しい相手に対して「有難う」と言わない傾向があると報告している。

中国人日本語学習者の感謝表現を扱ったものとしては孫（2007）がある。孫（2007）は設定された各場面において、中国人日本語学習者と日本語母語話者が使った感謝表現を比較した結果、感謝場面での「謝罪表現」の使用率において学習者と母語話者に差異が見られ、またその差異は学習者の日本語レベルおよび学習環境と関わっていることを明らかにした。しかし、それらの違いにより、学習者の感謝表現が異文化コミュニケーションの齟齬を招き、人間関係を悪化させているのかについての検討はない。この点を明らかにするには、学習者の発話に対する母語話者による印象調査が必要である。

外国語学習者の感謝表現に対する母語話者の印象調査を行った研究はEisenstein&Bodman(1986)と葉(2018)がある。Eisenstein&Bodman(1986)は談話完成テストによって得た上級ESLクラスに在籍する学習者の感謝の発話に対する英語母語話者の容認度を調査した。容認度の評価基準は、Not acceptable（容認不可）、Problematic（問題あり）、Acceptable（容認可）、Native-like/prefect（母語話者並）、Not comprehensible（理

解不可能）、Resistant（回答拒否）の6つであった。調査の結果、学習者の回答には広い範囲にわたり深刻な問題があった。学習者の発話に対する容認度に影響する要因として、設定された場面に対する熟知度、語用レベルおよび単語レベルの難しさが確認された。また、上級学習者でも、統語や語彙上の問題が多く、慣用句の間違いも頻繁に見られたと指摘された。

この研究は、学習者の感謝行動における不自然さを引き起こす要因を明らかにしており、非常に示唆的である。しかし、学習者は社会文化背景や教育環境が異なれば、語用レベル・単語レベルの難しさが異なると考えられるが、学習者の母語別の検証は十分なされていない。また、容認度の低い感謝表現はどのようなものかも十分に論じられていない。

一方、葉（2018）は研究対象を中国人日本語学習者に限定し、彼らによる感謝表現を日本語母語話者によって評定させた研究であり、本発表と最も関連する研究である。葉は設定された8つの場面において、学習者が発した感謝表現の中で使用頻度の最も高い表現について、母語話者はどのくらい「学習者の感謝の気持ち」を感じているかを7段階評定で調査した。その結果、母語話者の評価が5（感謝の気持ちをやや感じる）から6（かなり感じる）の間に分布していたことから、学習者の感謝表現がコミュニケーションに与える影響は少ないと結論付けられた。

葉の研究により、日本語母語話者が中国人日本語学習者による日本語の感謝表現において感謝の意を汲み取れていることが明らかにされた。しかし、各場面で使用頻度の一番高い表現のみを母語話者に評価させたため、学習者が使用した頻度があまり高くない他の感謝表現に対する容認度調査がなされていない。また、同じ表現に対する母語話者の評価は段階[1]から[7]までバラツキが大きかったが、葉の研究では母語話者評価のばらつきの理由について質的に明らかにされていない。そのため、やはり学習者の感謝表現の中には日本語母語話者にとって評価が低いものもあるの

表1. ウェブアンケートの場面設定

利益・負担の度合い	内容	発話相手	場面	発話相手	場面
利益大・負担小	携帯を落としたことを教えてくれた	教師	1	友人	4
利益小・負担小	エレベータでボタンを押してくれた		2		5
利益大・負担大	値段の高い店でご馳走してくれた		3		6

ではないかと考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、「普通話」（標準中国語）を母語とする中国人日本語学習者に絞り、日本語母語話者による評価に基づき、学習者による感謝表現の「適格性」を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下のリサーチクエスチョンに対する回答を試みる。

RQ1 中国人日本語学習者が使用する日本語の感謝表現に対し、日本語母語話者はどう評価するか。

RQ2 日本語母語話者が不適格な感謝表現と判定するのはどのような表現か。それらは形態的不適格性によるものか、語用論的不適格性によるものか。

3. 研究方法

3.1 中国人日本語学習者による「感謝表現」の収集

本研究では、日本滞在経験のない上級中国人日本語学習者64人（以下CJと称する）を対象とし、感謝表現を誘発すると予想される8つの場面¹⁾を設定し、各場面でのどのような表現を使うかを談話完成法によるウェブアンケートで記入させた。また、調査を実施した際、「場面を想定し、実際に話す通りに書いてください。何も言わない場合は書かなくてもいいです。また、言語以外（表情、しぐさなど）で表す場合は具体的に書いてください」という指示を与え、できる限り自然な発話が引き出せるよう工夫した。

アンケートの設定は、受益者が受けた利益の度合いと授益者にかけた負担の度合いの組み合わせ、および相手との人間関係の二つの要素を考慮

して設定した²⁾（表1）。調査は2019年5月から7月にかけて実施し、有効発話365件を収集した。ただし、苦勞したのに利益が小さいという「利益小・負担大」の場面は、発話相手にとっては「骨折り損のくたびれ儲け」になるため、自発的に行う可能性は低いと考えられる。従って、単純な感謝行動ではなく、「依頼-感謝」、また依頼される側による「謝罪」および依頼する側による「慰め」といった行動が連鎖して起こる場合が多い。このような感謝行動と他の発話行動との連鎖は、本研究では分析対象から除外し、今後の課題とする。

3.2 適格性評定調査

3.2.1 感謝表現の抽出

学習者の感謝表現を収集した後、それに対する適格性評定調査を行った。有効回答365件のすべてで評定をすると作業量が大きいため、収集した発話を節レベルに分割し、感謝表現のストラテジーによってラベリングし、代表的なものを抽出した。本研究で扱う「感謝表現のストラテジー」を表2に示す。

まず、各場面で3回以上使われた「感謝表現の

表2. 本研究で扱う「感謝表現のストラテジー」

	感謝表現のストラテジー	発話例
定型表現	感謝型	ありがとう
	謝罪型	すみません
非定型表現	受益者の気持ちの表出	嬉しい
	受益者の行為に関する言及	忘れてしまった／自分でもうちょっと探してみる
	恩返しと言及	次は私がおごるね
	授益者の行為に関する言及	もう助けましたよ／いろいろ調べて
	授益者にかけた負担の言及	お手数をお掛けしました
	授益者の気持ちに対する配慮	大丈夫、気にしないで
	恩恵の明示	助かった／お世話になった／〜てくれる(補助)／〜てもらおう(補助)
	プラス評価	おいしかった

使用パターン」を抽出した。「感謝表現の使用パターン」とは、「感謝表現のストラテジー」の組み合わせを指す。例えば、「すみません、ありがとうございます」という発話では、「すみません」は「謝罪型」、「ありがとうございます」は「感謝型」にあたるため、「感謝表現の使用パターン」は「謝罪型+感謝型」となる。この基準によって22種類のパターンを抽出した。これらのパターンに該当する発話数は321件で、有効回答の発話数（365件）を88.2%カバーしている。

そして、同じパターンにあたる発話において、言葉遣いの丁寧度に差がある場合、「ありがとうございます」のように敬語か丁寧語が付くものを高丁寧度発話とし、「ありがとう」「どうも」のような表現を低丁寧度発話とし、それぞれ1発話ずつ選択した。言葉遣いの丁寧度に差がない場合、感謝表現が異なる2発話をランダムに選択した。これにより合計44発話を選んだ（表4）。

3.2.2 適格性評定調査実施方法

学習者の感謝表現に対する適格性評定調査は2019年10月に日本語母語話者22名（以下JP）³⁾に対してアンケートで行った。評定基準を表3に示す。本研究では、日本語母語話者に学習者が口頭での会話状況を想定して回答したことを理解してもらうため、回答前に日本語母語話者に、これらの回答は日本語学習者が「その場面を想定し、実際に話す通りに書いてください」という指示を受けて答えたものであることを口頭で説明した。そ

表3. 適格性評定基準

数値	評定基準
0	何を言いたいかわからず理解できない
1	非常に失礼だと思う
2	少し違和感を感じたが、受け入れられる
3	素晴らしい・マナーが正しい・日本人のようだ
4	丁寧すぎる

の上で、抽出した感謝表現を提示し、最も当てはまる段階を表す数値を選択させた。この中で「3」「素晴らしい・マナーが正しい・日本人のようだ」と判定された発話だけを「適格性発話」とした。アンケートへの回答後、[3]以外を選んだ場合について、一発話ずつ判定した理由を聞き、それらを録音した。協力者一人あたりに要した時間は約30分であった。

分析にあたり、母語話者によるインタビュー内容をもとに、「ことばが間違っている」「聞いたことがない」といった評価を「形態的不適格」に関する言及とし、「失礼だ」「丁寧すぎる」「感謝を感じない」といった評価を「語用論的不適格」に関する言及とした。分類後、この2種類の不適格判定にはどのような表現が見られたかを量的、質的に検討した。

4. 量的調査の結果と分析

日本語母語話者による学習者の発話に対する評定結果を図1に示す。

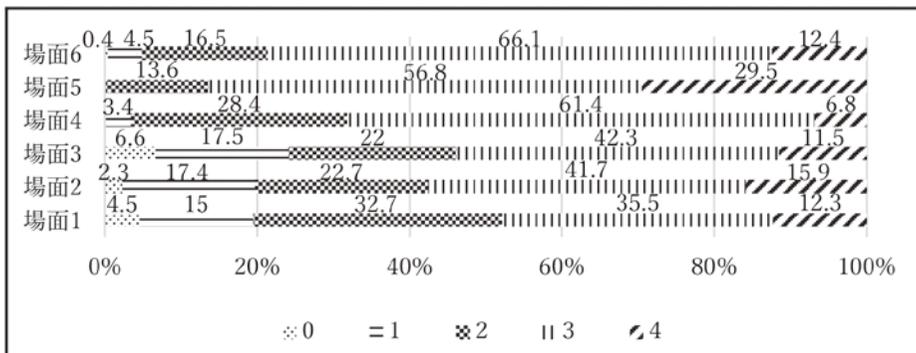


図1. 日本語母語話者による学習者発話の適格性評定結果

6つの場面において、[3]（適格性発話）と評定された発話例数は493で、全体の48.7%であった。すなわち、半数以上は日本語母語話者から不適格な感謝表現だと受け止められていることが分かった。

また、図1の評定点数の分布からみると、場面4-6（友人場面）で[3]と評定された発話は56.8%-66.1%の間であったのに対し、場面1-3（教師場面）が[3]と評定された発話は35.5%-42.3%の間となり、教師場面の比率が低い結果となった。以上より、教師に対する感謝表現のほうが、友人に対する感謝表現より不適格と評定されていることがわかる。

葉（2018）では各場面で使用頻度の一番高い感謝表現のみを母語話者に評価させた結果、感謝の気持ちは基本的に伝わるのでコミュニケーション上の問題はないとされていた。しかし、今回の研

究では異なる結果となり、上級日本語学習者の発話においても、「適切ではない」または「失礼である」と日本語母語話者が感じているものが多いことが明らかになった。

5. 質的調査の結果と分析

続いて、学習者による「不適格な」感謝表現とはどのような表現であり、その要因は何かを、場面ごとの評定結果およびインタビューの結果に基づいて検討する。各場面の適格性評定結果を表4に示す。発話者別の各発話の内容や母語話者による評定結果が示されている。各評定の比率の数値は小数点以下を四捨五入した数値とした。評価では、表4にあるように、回答者の回答をそのまま評価してもらった。しかし、評価コメントでは母語話者から問投詞の有無についての言及がなかつ

表4. 各場面の適格性評定結果

場面番号	発話番号	発話者	発話内容	各評定の比率 (%)				
				0	1	2	3	4
場面1	1	CJ1	すみません	0	5	50	46	0
	2	CJ2	あ、どうもすみませんでした。	0	5	50	23	23
	3	CJ24	はい、どうもありがとうございました。	0	18	32	32	18
	4	CJ34	あ、ありがとう	0	68	32	0	0
	5	CJ45	すみません、ありがとうございます	0	0	0	100	0
	6	CJ44	あっ申し訳ございません！ありがとうございます！	0	0	9	27	64
	7	CJ57	あっ、本当、ありがとうございました	0	14	41	36	9
	8	CJ53	ああ、注意してくれて、ありがとうございます	0	14	55	23	9
	9	CJ20	あっ、忘れちゃた、ありがとうございます	23	18	36	23	0
	10	CJ37	あっ、忘れました。ありがとうございました。	23	9	23	46	0
場面2	11	CJ8	すみません	5	0	50	46	0
	12	CJ5	はい、失礼いたしました。	9	55	18	5	14
	13	CJ57	はい、どうも	0	41	55	5	0
	14	CJ43	はい。5階です。ありがとうございます。	0	5	5	91	0
	15	CJ42	すみません、ありがとうございます。	0	0	0	100	0
	16	CJ9	本当に申し訳ないです。ありがとうございます	0	5	9	5	82

場面 3	17	CJ48	ほんとうにすみませんでした	14	32	32	0	23
	18	CJ1	スミマセン	5	14	46	32	5
	19	CJ21	ありがとうございます。	0	0	9	91	0
	20	CJ30	今日は大変ありがとうございました	5	9	14	55	18
	21	CJ8	ご馳走さまでした	0	5	73	23	0
	22	CJ54	お世話になりました	18	27	32	23	0
	23	CJ2	本当にすみませんでした。ありがとうございます。	0	27	36	5	32
	24	CJ40	すみません、ありがとうございます。	0	0	0	100	0
	25	CJ3	ご馳走さまで、本当にありがとう。	9	68	23	0	0
	26	CJ44	こちらこそご馳走さまでした！今日は本当にありがとうございます。ありがとうございました	27	27	23	23	0
	27	CJ57	えっ、本当にいいのですか。では遠慮なくありがとうございます。ありがとうございました。	9	18	36	36	0
	28	CJ18	御馳走様でした。先生、いつもお世話になっております。ありがとうございます。	0	0	9	27	64
場面 4	29	CJ50	あ！thank u！	0	0	14	86	0
	30	CJ54	はい、ありがとうね	0	0	59	41	0
	31	CJ57	あっ、本当、サンキュー	0	0	9	91	0
	32	CJ13	あ、呼びかけてくれてありがとうね	0	14	32	27	27
場面 5	33	CJ13	有難うございます	0	0	18	23	59
	34	CJ23	サンキュー	0	0	9	91	0
場面 6	35	CJ9	どうも	0	36	46	14	5
	36	CJ16	ありがとうございます	0	0	32	36	32
	37	CJ29	じゃあー、今度は私がご馳走するね。	0	0	5	96	0
	38	CJ30	じゃあ今度代わりにおごってあげる	0	5	32	64	0
	39	CJ53	ご馳走、ありがとうね	5	5	27	64	0
	40	CJ13	ご馳走してくれて有難うございます	0	0	0	32	68
	41	CJ32	ありがとうございます。今度私に奢らせて。	0	0	9	73	18
	42	CJ52	ありがとう、今度は僕がおごるよ	0	0	0	100	0
	43	CJ8	ご馳走さま	0	0	9	91	0
44	CJ17	ご馳走様でした	0	0	5	82	14	

たため、「あ」「あっ」「ああ」「えっ」といった間投詞は除いた。

5.1 教師場面における感謝表現の不適切さ

教師場面においては、場面1, 2, 3すべてで「すみません、ありがとうございます」が100%の比率で高評価となっていた。インタビューでは、

- (1) 教師に対して言う時は、「すみません、ありがとうございます」が一番無難かな
(JP12)

というコメントが聞かれた。これにより、「謝罪型+感謝型」パターンが目上の人に対する感謝表現の「通用パターン」である可能性が示唆された。

5.1.1 教師場面の感謝表現における語用論的不適格性

本節では、教師場面で低評価だった表現の傾向について、母語話者のコメントに基づいて述べる。表4から分かるように、同じ発話に対する母語話者の評価にはバラツキがみられた。そのため、評価者の個人差を考慮し、本研究では、[3]の適格性発話を選んだ割合が3割未満であったものを低評価発話とした。

母語話者のコメントを分析した結果、母語話者からは「語用論的不適格性」および「形態的不適格性」に関する言及が観察された。以下、この2種類の不適格性についてコメントをもとに質的に検討する。

まず「語用論的不適格性」は、「ストラテジー選択の不適切さ」「ストラテジーの量の不適切さ」「丁寧さの不適切さ」の3種類に大別することができた。これらの不適格さは連続性を持っている、あるいは複数の不適切さが複合的に表れていることが多かった。

まず、ストラテジー選択の不適切さについて述べる。これは、その言語場面には不要なストラテジーを使用した場合、または使うべきストラテジーが使われていない場合である。例えば、「0」と多く判定された発話に、発話9「あっ、忘れちゃった」発話10「あっ、忘れました」があった。これについては、母語話者から(2)のような「『心の声』の言及はいらぬ」とのコメントが多くみられた。これは不要なストラテジーが使用されたケースである。括弧内は発話者番号、評点点数、評定対象とした発話番号である。

- (2) 心の声なんか、その人に向かっていうとかで、独り言みたい。教師の目を見て「あっ忘れちゃった」っていうのは、ちょっと違うかな。(JP1, [0], 発話9, 10)

発話1「すみません」の単独使用は、「すみません、ありがとうございます」と言うべき場面での「感謝型」ストラテジーの不使用である。これについては(3)のようなコメントがあった。

- (3) 「教師が気づいてくれて、しかも教えてくれたってことに、感謝がないと思って。」
(JP7, [2], 発話1)

「すみません、ありがとうございます」が的確な発話とされていることを考えると感謝のストラテジーの脱落と考えられる。しかし、これまでの研究では、感謝表現の代わりに謝罪表現が用いられることは適切と言われてきた。そのため、これが不適格になる理由は別にあると考えられる。このような感謝場面での謝罪型ストラテジーの単独使用の不適切性については、第6章で詳しく論じることとする。

二番目はストラテジーの量の不適切さについて述べる。これは、適切なストラテジーが用いられているが、量に過不足がある場合である。例えば場面3(教師が高い店でごちそうしてくれた)での発話21「ご馳走さまでした」、発話22「お世話になりました」である。これらについては(4)のようなコメントが寄せられた。

- (4) 「高いお寿司だから、一言だけで足りない。」
(JP6, [2], 発話21, 22)

コメント(4)が示すように、相手にかけた負担の度合いによって感謝量を調整する必要がある。負担が大きければそれだけ感謝の量を大きく示す必要があるが、それらが十分に行われなため不適格となっている。逆に量の過剰による不適切さも観察された。発話2「どうもすみませんで

した」と発話6「申し訳ございません」については、コメント(5)(6)にあるように、感謝の気持ちの表明ではなく、謝罪になっているという指摘が得られた。同様に、発話12「失礼いたしました」、発話16「本当に申し訳ないです」、発話17「ほんとうにすみませんでした」も、適格性発話だと判定された割合がいずれも5%以下であった。このような表現は、謝罪の気持ちの過剰表明により、感謝ストラテジーが発動されていないため不適格となっているといえる。

- (5) 「メールとかで謝るときは「申し訳ございません」とか。感謝に言う言葉じゃないですけど。」 (JP5, [4], 発話6)
- (6) 「これは感謝じゃなくて、謝罪の方が強くて。」 (JP12, [2], 発話2)

三つ目は「丁寧さの不適切さ」である。具体的には敬語を用いるべきところで敬語が用いられない、または、敬語や丁寧体を用いたことで「丁寧すぎた」場合である。特に1(非常に失礼だと思う)の評定が高かったのは場面1の発話4「あ、ありがとう」([1]:68%)、場面2の発話13「はい、どうも」([1]:41%)であった。一方、「丁寧すぎる」と評定されたのは、発話28「いつもお世話になっております」([4]:64%)であった。(7)のコメントにあるように丁寧さが不自然さだけでなく、ストラテジー選択の問題もあると思われる。

- (7) 「いつもお世話になっております」はなんか文章で使う言葉な気がするんですよ。メールの初めとか、電話とかに、決まり文句みたいな感じ。(JP16, [4], 発話28)

なぜ不要なストラテジーが使用され、または使うべきストラテジーが使われなければ、発話が不適格になるのだろうか。これは、グライスの協調の原理や4つの下位原則によって説明できる。グライス(1945)は協調の原理(cooperative principle)、すなわち会話参加者の双方は相手の

目的を自分も共有しようと努めることを主張し、コミュニケーションにおける規範的规则として、量、質、関連性、様態の4原則を立てた。その中で、「量の原則(maxim of quantity)」は、聴者に与える情報量を適量にせよというものである。盛り込む情報は多すぎても少なすぎてもいけないというルールである(山岡他, 2010)。不要なストラテジーを使用した、または使うべきストラテジーが使われていないというストラテジー選択の不適切さ、およびストラテジーの量の不適切さは、グライスの「量の原則」に違反している。

しかし、グライスの協調の原理や4つの下位原則はコミュニケーションの成立と関連する理論であり、「丁寧度」のような人間関係の構築における対人配慮を説明できない。対人配慮を説明するには、Brown & Levinson(1986)のポライトネス理論がある。例えば先生に対する敬語の不使用は、非常に失礼であると評定されたが、情報量には問題がない。しかし、敬語は敬意の表明であるため、敬語の不使用は、聞き手の他者に尊敬されたい、好かれたいというポジティブ・フェイス(positive face)に脅かす行為になる。したがって、語用論的不適格性発話になる。

5.1.2 教師への感謝表現における形態的不適格性

次に「形態的不適格性」について述べる。形態的不適格性については、大きく、語彙の選択に関する不適格さ、文法的な不適格さについての言及が見られた。

語彙の選択に関する不適格さは、その場にふさわしいコロケーションの崩れが起こっていることによって起こっている。場面3の発話26「こちらこそ、ごちそうさまでした!」については自分自身も恩恵の提供があったことが前提である。そうでない場合は(8)のコメントにあるように不適格となる。場面3の発話27「遠慮なくありがとうございます」も(9)で指摘されているように「遠慮なくいただきます」というコロケーションのミスである。(10)の例も「注意」という語彙の選択ミスである。

- (8) 「こちらこそ」って何を言ってるだろうっていう、ちょっと違うなあ。

(JP4, [0], 発話26)

- (9) 「遠慮なくありがとうございます」っていうのがおかしいな。普通「では遠慮なくいただきます」とか、「遠慮なく、ご連絡ください」とか使うね。

(JP4, [2], 発話27)

- (10) なんか注意じゃないかなあっていう。「注意」だと、落とす前に、「携帯忘れないようにしてね」とかの注意だったら「注意」なんですけど、この場合は「教えてくれて」とか「言ってくれて」とか。

(JP2, [2], 発話8)

文法的不適格性は文法的な誤りである。以下の発話25「ご馳走様で、ありがとうございました」については「聞いたことない」というコメントが得られた。

しかし、これら、「形態的不適格性」によるものは、学習者データからは1回しか見られなかったことが多かったため、中国人日本語学習者共通の傾向と言えるほどの特徴はなかった。

5.2 友人場面における分析

続いて、友人場面に使用された感謝表現の「適格性」について述べる。

友人に対する各場面において、支持が高かった発話はそれぞれ異なり、教師場面のように高評価の「共通パターン」が観察されなかった。100%の比率で高評価となっていた発話は場面6の発話42「ありがとう、今度は僕がおごるよ」であった。王(2008)は相手にご馳走された時、中国人は「下次我请你吃饭(今度ご馳走するね)」という「恩返しを申し出る」のが一般的だが、日本人は言わないという相違点を指摘した。しかし、今回の調査結果によると、「ありがとう、今度は僕がおごるよ」という「恩返しの言及」は100%で支持され、王(2008)とは異なる結果となった。インタビューで母語話者に聞いたところ、コメント(11)に示

したように、相手との人間関係により、日本人でも恩返しを申し出ることがあることが示唆された。

- (11) 教師に対しては言わないけど、友人同士だったら、「今度奢るね」って言う。

(JP12, [3], 発話50)

5.2.1 友人場面の感謝表現における語用論的不適格性

ここからは、友人場面における「語用論的不適切性」と「形態的不適切性」の具体例をあげながら検討していく。

まず友人場面において、友人同士であるため、聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の度合いが教師場面より少ないことから、ストラテジーの選択や量に対する制限はそれほど厳しくない。逆に感謝を深く真面目に言うと不適格だと判定される恐れがある。本研究では、友人場面における「語用論的不適格性」は、主に「丁寧さの不適切さ」に当たった。

母語話者の評定結果によると、「ありがとうございます」のように友人に対する敬語の使用(発話33, 36, 40, 41)は不適切だと評定された比率が高かった。しかし(12)のような「言い方にもよる」という意見もあった。このコメントにより、学習者の口振りといった非言語行動が、言語表現の不適格を修復する役割を果たすことが伺える。

- (12) 「ありがとうございます〜す」みたいな。なんか、めっちゃ固く「ありがとうございます〜す」っていうのはちょっと丁寧すぎるかな。たぶん言い方の問題だと思います。

(JP20, [4], 発話33, 36, 40, 41)

同じく「真面目過ぎる」とコメントされたのは発話30「はい、ありがとうね」における「はい」の使用であった。応答表現「はい」は、日本語教育において初級の早い段階から紹介される表現である。教科書では中国語の「是、是的」に対応する肯定表現と紹介されており、「はい、そうです」

というコロケーションで導入するのが一般的である。しかし、「はい」はただの肯定表現ではなく、「強い」「覚悟」「ビックリマーク」「決心」「しっかり」「かたまる」「高まる」といった強い気持ちの表れとしてとらえられている（金山・二宮，2019）。そのため、友人に対する感謝場面での「はい」の使用は「真面目すぎる」という印象が残されるわけである。現在の日本語教育現場では、「はい」のニュアンスの説明，使用場面・対象の説明が十分とは言えないと考えられる。

さらに、コメント(13)により、「どうも」は「感謝類」表現として軽い感謝の気持ちの表出で友人に対しては使用されるが、相手にかけた負担の度合いにより、不適格だと評定される場合もある。

- (13) 「どうも」って友人に使うのかなっていう感じで、ご馳走したのものにもよるかも。お寿司だったら「どーもー」って駄目かもしれない。ジュースおごってもらったら「どーもー」って言うんけど
(JP20, [1], 発話35)

5.2.2 友人場面の感謝表現における形態的不適格性

友人場面における「形態的不適格性」として、(14)に示した動詞「呼びかける」という語彙の選択ミスが指摘され、また発話47「ご馳走、ありがとうね」の「ご馳走」という「ご馳走さま」の省略形式は「言わない」というコメントが得られた。

- (14) 言ってくれてありがとう。「呼びかけてくれて」は若干ニュアンスが違う。なんか人呼ぶときに、「呼びかける」。
(JP6, [4], 発話32)

5.3 質的分析のまとめ

これまで述べてきた質的分析の結果を表5に示す。

小池(1998)は、一般日本人が日本語学習者の会話能力をどのように評価するかを調べるために、初級学習者の到達度試験として行われたロールプレイを、外国人との接触経験がほとんどない一般日本人に見せ、自由に印象を述べてもらうという調査を実施した。母語話者によるコメントに文法、発音、談話展開、流陽さ、ストラテジー、

表5. 学習者の感謝表現に見られた不適格性

	要 因	具 体 例
語用論的不適格性	ストラテジー選択の不適切さ	「心の声」の言及 感謝のストラテジーの脱落
	ストラテジーの量の不適切さ	ストラテジーの単独使用 謝罪の気持ちの過剰表明
	丁寧さの不適切さ	教師に対する場面の敬語の不使用 友人に対する場面の敬語の使用 「いつもお世話になっております」 「どうも」
形態的不適格性	語彙の選択に関する不適格さ	「こちらこそ、ごちそうさまでした」 「遠慮なくありがとうございます」 「注意してくれてありがとうございます」 「呼びかけてくれてありがとうね」
	文法的な不適格さ	「ご馳走様で、ありがとうございます」 「ご馳走、ありがとうね」

表情、雰囲気など広い範囲に及んでいる。その中で、発音・文法のミスは「今、勉強中の人だから」とか、「外国人だから」といった理由でよく許容されるが、発話行為の誤りははっきり誤りとして現れないため、学習者の人格上の欠点とみなされてしまうと小池（1998）は指摘した。しかし、本研究では、「形態的不適格性」および「語用論的不適格性」双方の要因によって評価が下がっており、コミュニケーションの成否に影響を及ぼすことが分かった。

小池（1998）と異なった結果が出たのは、方法論にいくつかの影響があると考えられる。本研究は日本語学習者の発話を文字の形で印象評定を行ったのに対し、小池（1998）は日本語学習者と担当教師とのロールプレイによる動画データを素材とし、日本語母語話者に自由に印象を述べてもらった。「学習者のにこやかな表情から積極性を感じる」という母語話者のコメントから、表情といった非言語行動が言語行動による不適格性を緩和する役割があることが推察される。また、小池が指摘した日本人は一定の評価軸はなく、個々の学習者のレベルを考慮して評価しているようであることも影響の一つとして考えられる。本研究は日本語能力試験1級に合格した学習者に絞っており、小池（1998）より学習者の言語表現能力が高いため、要求レベルも高くなり、文法上のミスに対する寛容度が低くなる可能性がある。さらに、小池（1998）では、日本語教師が同様に評価させ、一般日本人の評価のポイントとの相違点と一致点を分析した結果、ミスに着目してマイナス評価する日本語教師に対し、外国人との接触経験がほとんどない一般日本人はミスではなく、ミスによって生じた誤解を解消するストラテジーがとれたことに着目してプラス評価する傾向があった。そのため、協力した日本語母語話者の異文化接触経験や立場により印象評定結果が変わる。

学習者がそれら不適格な感謝表現を使用する原因として、学習者に直接インタビューで確認する必要があるが、学習者個人のミス、教育の影響および母語の干渉などの要因があると推測される。

今回見られた形態的な誤りは、1回しか見られなかったものも分析対象としたため、それは学習者個人のミスである可能性が高い。しかし、語用論的不適格な表現は上級学習者でも共通的な問題点として多くみられた。特に、謝罪の気持ちの過剰使用と丁寧度の誤りによる不適格は、各表現の使用ルールの説明が十分にされていないためだと考えられる。また、謝罪表現の単独使用は、日本語母語話者と日本語学習歴のない中国語母語話者に同じ調査を行ったところ、日本語母語話者にはないが、中国語母語話者による中国語の回答には謝罪表現の単独使用が確認された。そのため、学習者の使用は母語の干渉を受けている可能性が考えられる。

6. 感謝表現での「謝罪表現」の使用について

5.1で述べた通り、教師場面においては、場面1, 2, 3すべてで「すみません、ありがとうございます」が100%の比率で高評価となっていた。しかし、不適格になってしまう場合も見られた。本節では、中国人学習者がなぜ不適格な表現を使うかを検討するため、なぜ「すみません」が感謝の意を含んでいるかを論じたのち、日本語母語話者と中国人日本語学習者へのインタビュー調査結果に基づいて学習者がこれらの表現をどのように捉えているかを論じる。

6.1 「すみません」の意味と用法

まず、辞書における「すみません」の意味記述を見ていく。『国語大辞典』（1988）では、「すみません」を「申し訳ありません。ありがとうございます。人にあやまる時、礼をいう時、依頼する時などに使う」（『国語大辞典』:1383）と記されているように、「すみません」には、謝罪以外に感謝や依頼などの用法があると記述されている。さらに、『明鏡国語辞典』（2011）では、「すみません」が感謝表現として使用される条件は「話し手は利益を得た」かつ「聞き手は不利益を被った」

場合であると説明している。

6.2 「ありがとう」と「すみません」の使い分け

次に「ありがとう」「すみません」の使い分けに関する先行研究について示す。熊取谷（1990）は、感謝の場面で「すみません」を使用する現象を「感謝の表現交替現象」と定義した。熊取谷（1990）によると、このような言語現象は、「話し手にとっての快適状況」を「聞き手にとっての不快感」として扱う視点の移動によって引き起こされた現象である。森山（1999）では、感謝とは聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の修復であり、謝罪とは聞き手へ損害を与えたことによる不均衡の修復であると、関係修復の観点から両者の違いを論じた。さらに、岡本（1992）は、「ありがとうタイプ（感謝型）」と「すみませんタイプ（謝罪型）」の感謝表現の状況的使い分けの規定要因を検討し、相手の負担が大きいと感じられる状況ほど謝罪型が多用され、感謝型が少なくなる傾向があると述べている。しかし、本調査で設定した相手の負担が小さい場面1や場面2には、「すみません、ありがとうございます」が高評価された。したがって、「ありがとう」と「すみません」の状況的使い分けの要因は他にあると考えられる。

「すみません」が感謝表現として使用されるのは「話し手が利益を得た」かつ「聞き手に負担をかけた」場合である。しかし授業の後で学生が教師に「ありがとうございます/ありがとうございました」と伝えることはあるが、「すみません/す

みませんでした」は使わない。その理由は、知識を学生に教えるのが教師の仕事であり、わざわざ学生のために義務以上のことをしたわけではないためと考えられる。逆に、放課後にある学生が教師から個別指導を受けた際「すみません、ありがとうございました」と感謝するのは自然になる。

このことから、「聞き手にかけた負担の度合い」より、「すみません」の使用は「当然性」にかかわるといえる。言い換えれば、相手に対して「しなくてもいいこと」をしてくれた場合は、「すみません」が選好されやすいのである。逆に、もし聞き手にとって該当行動が義務的な行為や仕事の場合、たとえその行動の負担が大きくとも、「相手は私のために不利益を被った」と自分を責める必要はそれほどないと言えよう。その場合、「すみません」より「ありがとう」が選好されやすい。

本研究では、伴野（2009）の定義を援用し、「当然性」を「ある主体の行為について、その主体自身またはほかの主体によって認識される該当行為の妥当性の高低」と定義する。感謝行動における「当然性」は、聞き手に行ってもらった行為について、話し手が認識する該当行為の妥当性の高低になる。

次節では、学習者が感謝場面で使用される「すみません」をどのように捉えているかを検討するため、中国人日本語学習者2名と日本語母語話者2名に行った聞き取り調査について述べる。協力者の内訳を表6に示す。

表6. 聞き取り調査対象者の内訳

	番号	性別	年齢	日本語レベル	履歴
日本語学習者	C1	女	20代	N1	中国の大学で日本語学科を卒業、現在日本の専門学校に在籍中 日本滞在期間：4年間
	C2	男	20代	N1	中国の高校を卒業後、日本の大学に進学、現在日本の大学院に在籍中 日本滞在期間：8年間
日本語母語話者	J1	女	20代	—	日本の大学院に在籍中
	J2	女	30代	—	日本語教師

6.3 インタビュー調査の結果

6.3.1 感謝の場面での謝罪表現の使用の意識について

「すみません」の使用条件について日本語学習者の2名とも「相手に負担をかけた場合に『すみません』が感謝表現として選好されやすい」と回答した。ここではC2の回答を示す。(日本語訳は筆者より)。

「すみません」是有感谢的意思。表达自己的歉意，还有谢意都会含有。这个歉意的由来是说，你帮我做了一件事情，花了你的时间和精力这样的。(C2)

(「すみません」は感謝表現として使えます。恐縮も感謝も含まれています。この恐縮の気持ちは、相手の時間や精力を費やして何かのことでしてもらったことに由来します。)

日本語の「すみません」に対応する中国語は「不好意思」であると思われる。これは「すみません」と同様、感謝や謝罪する場合に用いられる。しかし、中国語の「不好意思」の使用頻度は日本語の「すみません」よりはるかに少ない。中国語母語話者による感謝場面での詫言表現使用率は日本語母語話者の4分の1という報告がある(孫, 2007)。孫(2007)は中国語のほうが詫言表現の使用頻度が少ない理由について解釈していないが、筆者は、中国人が「恩返し」の表明が好むことと関わっていると考えられる。

中国人は「滴水之恩，涌泉相報(滴水之恩を受くる人，必ずや湧泉であい報ゆるべし)」という伝統的な文化を引き継ぎ、相手の行動から利益を受けた際、言葉やお金より、実際のお礼行動のほうが選好しやすい。恩返し」の表明は感謝の気持ちを表すとともに、相手に対して「借り」のあることを認め、相手にかけた負担を補償する(王, 2008)。したがって、中国語では「すみません」という恐縮の気持ちをわざと強調する必要はなく、その代わりとして「恩返し」の言及が要求される。それに対し、日本人はネガティブ・フェイスが重

視される言語文化である(Brown & Levinson, 1987)ため、相手に迷惑をかけてはいけないという思想の影響が大きい。そのため、ポジティブ・ポライトネスである「ありがとうございます」より、ネガティブ・ポライトネスである「すみません」を多用するのであろう。

6.3.2 「当然性」に対する認識

このように、中国人の「助け合うのがマナー」、日本人の「お互いに迷惑をかけないのがマナー」という文化背景の違いにより、話し手の感謝行動の「当然性」の高低に対する認識が異なっている。それにより、中国語話者による「すみません」の使用率が日本語話者よりはるかに低いことが解釈可能になる。一方、日本語母語話者2名に対する聞き取り調査によると、彼らも聞き手との関係や聞き手の文化背景などを考慮しながら感謝表現を調整する。日本語母語話者J2の発言を以下に示す。

なんか自分が先生の立場で、学生に何かお願いしたときに、学生がそれに対してやってくれたことだとか、そういう場面でも、学生に対して、学生は本当に忙しそうだったら「ごめんね」とかいうかもしれないけど、なんとなく「ありがとう」を使うかもしれないかな。(中略)日本人同士だと、上下関係あっても「すみません」って使うかもしれない。なんだけど、相手が外国人の時に、「すみません」よりは、「ありがとう」を使うかもしれない。私は外国に長くいた。親しい間柄だと、なんか「すみません」を使うと、距離を感じるって言われたことがあったわね。(J2)

J2の回答を分析すると、日本人同士の場合、依頼は相手のネガティブ・フェイスを脅かす行為になるため、特に目上の人に対してネガティブ・フェイスを補償する謝罪表現が選好されやすい。一方で、目下の人に対しては「ありがとう」のほうが選好されやすいと言える。以上のように、コ

コミュニケーションにおいては、話す相手の文化・言語背景に照らして、適格な表現を選ぶ意識が求められている。

6.3.3 「すみません」の習得状況

しかし、中国人学習者は「すみません」のみでなく、「申し訳ありません」「失礼しました」といった感謝場面で使用されない謝罪表現も使用してしまい、日本語母語話者に「不適格性発話」だと評定された。「すみません」が日本語教育現場で、どのように説明されているかを、中国の大学の日本語学科を卒業したC1に対して聞き取りを行った。

我们没有教过这些。教课书上就是写着「ありがとう」就是谢谢，「すみません」就是道歉，对不起。然后老师说口语的时候会发音成「すいません」。我们当时上的就纯道歉，一点感谢的意义都没有。是自从来了之后，就是听周围的日本人这样说，所以自己感觉这个是有两个意义的。

(C1)
(そのようなことは習ったことがないです。教科書には「ありがとう」が感謝、「すみません」が謝罪って書いてあります。そして、話し言葉では「すいません」って発音するって先生に教えてもらいました。当時は完全な謝罪で、感謝の意味が全然なかったです。日本に来てから、周りの日本人はこういうふうに使ってるから、自分も「すみません」が二つの意味を持ってるんだって考えたんです。)

还有为什么要用「申し訳ございません」这些，主要是觉得这样对老师更恭敬吧。「すみません」平时我们对普通朋友啊之类的也用，所以觉得对老师的话，应该更上一个程度。不过有时候恭敬过头了也会有一些双重敬语啊之类的出来。

(C1)
(また、どうして「申し訳ございません」を使うかという、先生に対して、このような表現はより丁寧だからじゃないかなと思いま

す。「すみません」は普通の友達に対しても使うので、先生に対する場合、より丁寧に表現したいです。でも確かに、丁寧すぎると、二重敬語とかが出てきます。)

C1の発言により、C1は日本語授業で「すみません」が感謝の場面でも使えることや「ありがとう」との違いについての説明を受けておらず、日本で自然習得したことが分かった。また、「すいません」との違いとして、「『すみません』の方がより深く謝罪しているイメージがある」(J1の回答)という回答があったように、この二つの表現の背後にあるニュアンスについての説明を教育現場で十分になされていない可能性がある。

また、「申し訳ございません」といった謝罪にしか使われない表現が、感謝場面で使用されてしまう理由について、C1は教師に対しより丁寧に表したいからとの発言があった。このような、中国人日本語学習者による「謝罪の気持ちの過剰表明」といった語用論的不適格性を明らかにすることが、学習者の感謝表現の習得にも役立つと考えられる。

7. まとめと今後の課題

本研究では、ウェブアンケートで収集した中国人日本語学習者の談話完成法による発話に対し日本語母語話者による「適格性」評定調査を行った。その結果、判定された1,013発話例において「不適格性発話」と評定された発話例数は493 (48.7%)で、半数は「不適格」な発話と受け止められていたことが明らかになった。特に友人より、目上の教師に対する感謝表現に不自然な印象の判定が多いことが分かった。具体的には、学習者による「不適格な感謝表現」には、形態的不適格性と、語用論的不適格性の2つが観察された。しかし、それは常に不適格というものではなく、仮に不適格な感謝表現であっても言い方を変えれば許容されることから、学習者の口振りといった非言語行動が、言語表現の不自然さを修復する役割を果たしてい

る可能性があることが分かった。

葉 (2018) では感謝の気持ちは基本的に伝わるのでコミュニケーション上の問題はないとされていたが、今回の研究によって、上級日本語学習者の発話にも、「適格ではない」または「失礼である」と日本語母語話者が感じているものが多いことが明らかになった。

そのため、日本語教育現場では、本調査で見られた学習者の感謝表現における不自然な語彙・文法・表現の情報を日本語学習者と共有し、話し手が受けた利益の度合い、聞き手にかけた負担の度合いや聞き手との人間関係に応じて、感謝表現を調整する意識を持たせる指導が求められる。また、「すみません」は該当行為の「当然性」が低い場合に選好されやすいが、日中の文化・思想的背景の相違、人間関係、聞き手の身分といった要素が「当然性」の意識の高低に影響を及ぼすため、学習者に当然性の意識のずれの存在を留意点として指導すべきと考える。

しかし、本研究には残された課題が多くある。本研究はDCTによるアンケート調査データを用いたため、回答者の非言語行動が観察できなかったという限界がある。また、感謝行動と他の発話行動との連鎖、および日本語母語話者の属性を視野に入れる必要があると考える。今後は、多様な場面で発される自然会話を収集し、学習者の言語・非言語行動を観察する。さらに、今回の調査では個人差が深く追跡調査できていないため、今後は学習者に対するフォローアップインタビューおよび用いられているテキストへの考察を行い、学習者が日本語の習得過程で受けるインプットとの関係について調査したい。

【注】

- (1) 「各場面の直前指示文（感謝の応答前の発話）は以下の通りである。

場面1	教師：携帯落としましたよ
場面2	教師：5階ですね。（5階のボタンを押しました。）
場面3	教師：今日のご馳走しますね。（教師がお金を支払った）
場面4	友人：携帯落としましたよ。
場面5	友人：5階ね。（5階のボタンを押しました。）
場面6	友人：今日のご馳走するね。（相手がお金を支払った）

- (2) 場面設定の方法は以下の通りである。[1] 筆者が周りの中国人留学生に対しインタビューを行い、中国でも日本でも感謝行動がなされる21場面を収集。[2] 中国語母語話者と日本語母語話者8名ずつがそれらの場面の利益・負担の度合い（大小）を判定。[3] 判定結果から日中ともに利益・負担の大小が80%以上一致した4場面（①利益大—負担大/②利益大—負担小/③利益小—負担大/④利益小—負担小）を抽出。
- (3) 調査協力した中国人日本語学習者は全員中国天津市T大学日本語学部在籍、日本語能力試験1級に合格している大学生である。性別は男性12人、女性52人であった。調査に協力した日本語母語話者は全員日本の大学の学部生であり、男女各11名で、年齢は19歳から21歳までである。専攻は、医学部、経済学部、人文学部等である。

【参考文献】

- 王静「言語行為理論在汉日翻译教学中的运用」『日语学习与研究』4, 2008, pp. 89-96.
- 岡本真一郎「感謝表現の使い分けに關する要因 (2) —『ありがとうタイプ』と『すみませんタイプ』は同のように使い分けられるか—」愛知学院大学文学部紀要, 22号, 1992, pp. 35-44.
- 金山泰子・二宮理佳「大学生の『はい』『ええ』の使い分けに關する意識調査 —漫画を使用したアンケートを通して—」『ICU日本語教育研究』16, 国際基督教大学グローバル言語教育研究センター, 2019, pp. 23-37.

- 熊取谷哲夫「日本語の「感謝」における表現交替現象とその社会言語学的モデル」『表現研究』52, 表現学会, 1990, pp. 36-44.
- 小池真理「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ: 初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価」『北海道大学留学生センター紀要』2, 1998, pp. 138-156.
- 清水崇文『中間言語語用論概論』東京:スリーエーネットワーク, 2009, p.iv.
- 孫守峰「感謝場面に使用される詫び表現の習得—在中と在日中国人学習者の詫び表現の使用率とパターン」『日本語・日本文化研究』17, 2007, pp. 165-174.
- 滝浦真人・大橋理枝『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興, 2015, p.219.
- 伴野崇生「『行動を促すコミュニケーション行為』の『当然性』に関する理論的考察」『待遇コミュニケーション研究』6, 2009, pp. 97-112.
- 森山卓郎「お礼とお詫び—関係修復のシステムとして」『国文学—解釈と教材の研究』第44巻第6号学灯社, 1999, pp. 78-82.
- 山岡政紀・牧原孜・小野正樹『コミュニケーションと配慮表現』明治書院, 2010, p.45
- 葉倩倩「日中接触場面における感謝表現に関する研究—日本語母語話者と学習者の使用実態および母語話者の評価を中心に—」湖南大学修士学位論文(未刊行), 2018
- 李華勇「日本語と中国語における『感謝の言語行動』の対照研究」2014,
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/50573/> (最終確認日: 2021.6.24)
- 『国語大辞典(新装版)』小学館, 1988, p. 1383
- 『明鏡国語辞典』第二版, 大修館書店2011, p. 511
- Brown, P. & Levinson, S.C. *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press.1987 (邦訳: 田中典子監修 (2011) 『ポライトネス—言語使用における, ある普遍現象』研究社)
- Eisenstein, M., & Bodman, J. W. 'I very appreciate': Expressions of Gratitude by Native and Non-native Speakers of *American English*. *Applied Linguistics*, 7 (2), 1986, pp. 167-185.
- Grice, H. P. 'Logic and Conversation', in Cole and Morgan, op. cit., 1975, pp. 41-58.